

原

著

新潟県における自殺と遺書の法医学的検討

新潟大学大学院医歯学総合研究科
地域疾病制御医学専攻地域予防医学講座法医学分野
(主任：山内春夫)
伊 沢 寛 志

Forensic Analysis of Suicide Cases and the Suicide notes
Investigated in Niigata Prefecture

Hiroshi IZAWA

*Division of Legal Medicine Department of
Community Preventive Medicine Course for
Community Disease Control,
Niigata University Graduate School of
Medicine and Dental Science
(Director: Prof Haruo YAMANOUCHI)*

Abstract

A total of 371 suicide notes were collected in 868 suicide cases investigated by the Niigata prefectural police during one year of 1999. The ratio of suicide completers (297 cases) who left their notes was 34.2%. The suicides were classified according to sex, age, suicide manner, motivation, history of mental illness and previous attempts or threats of suicide. The detailed form was investigated and their message of the notes was examined using 14 key words including apology, pain of sickness, thanks, requests after death and unwilling part. The psychological status of the note can be understood as a combination of the key word. The result of key word classification showed that many factors are comprised in a motive of suicide. The police made a classification of suicide motive into 8 classification and limited it to one, but it was difficult to select a main motive to only one.

Key words: suicide, suicide note, key word

Reprint requests to: Hiroshi IZAWA,
Division of Legal Medicine
Niigata University Graduate School of
Medicine and Dental Science
1-757 Asahimachi-dori,
Niigata 951-8510 Japan

別刷請求先：〒951-8510 新潟市旭町通り 1-757
新潟大学大学院医歯学総合研究科法医学分野

伊 沢 寛 志

はじめに

人口動態統計¹⁾によると、平成11年の新潟県の自殺者数は836人にのぼり、人口10万人当たりの死亡率は33.7であった。これは秋田県（自殺者数486人、死亡率40.7）、岩手県（自殺者数486人、死亡率34.4）に次いで全国第3位の死亡率である。山内²⁾は吉岡の研究「日本人の自殺の実態把握と予防医学へのアプローチ（平成7年度～8年度文部省科学研究）」に参加し、表面上自殺の原因とされているものの背景に迫るための調査マニュアルの必要性を指摘し、自殺の背景を明確にすることが、自殺の防止対策の重要な基礎資料になるはずとしている。

そこで、今回の研究では自殺の背景にある動機を窺い知る一助として、多数の遺書について検討を行った。遺書の有無は検死の際の重要なポイントではあるが、通常は単に「自他殺の別」の判断材料として処理されるだけのことが多い。自殺に関する研究は精神医学領域を中心にいろいろと行われているが、遺書にポイントを絞った研究は、本邦では非常に少なく、その形式などに関する客観的データや内容分析も殆どない。そこで、1999年の新潟県における868例の自殺例と297例で残された遺書についてその形式と内容等について法医学的検討を行った。

資料と方法

1999年（平成11年）に新潟県で警察が行った検死2,469例のうち、自殺は868例で、検死全体の34.8%を占めていた。このうち297例で遺書が残されており、その割合（以下、「遺書率」とする）は34.2%であった。本研究では、警察が自殺と判断した例をそのまま自殺として検討した。また、遺書に関しても、遺書か否かの判断に疑問を感じるものも存在したが、警察が遺書と判断したものすべてを遺書として検討した。

自殺者の検死報告などをもとに、死因の種類、自殺の手段、自殺の動機、遺書の有無と年齢、性別、死亡場所、死亡推定日時など、必要な項目につい

て、情報を収集した。遺書と判断されたものについては、内容と文字数を確認し、データベース化を行った。

尚、本研究では終始個人のプライバシーを十分考慮し、かつ遺書の内容の匿名性には特に配慮をしながら行なった。

結果と考察

1. 遺書の形式（通数、文字数など）

多くの遺書では、通常の手紙と同様に、宛先、本文、日付・時刻、署名等から成り立っている。1枚の紙に書かれているものはすべて1通とした。2枚以上書かれている場合で、宛先、署名、日付などの形式や内容から判断して独立している場合にはそれぞれを1通づつと数えた。また、文章が連続していると判断した場合には複数枚の1通とした。

1) 通数

297例のうち、通数が不明であった67例以外の230例について遺書の通数をみると、1通が145例（63.0%）で、2通が43例（18.7%）、3通20例（8.7%）、4通9例（3.9%）、5通4例、6通4例、7通2例で、8通、9通、12通が各1例であり、2通以上の遺書が85例（37.0%）であった。越永³⁾の場合では、1通が62.8%で、2通が17.9%でこれに次いでおり、ほぼ同じ割合であった。

2) 枚数

遺書を確認できた371通のうち、1枚の遺書が336通で、2枚の遺書が25通、3枚が4通、4枚が2通で、5枚、8枚、10枚、12枚の遺書が各1通あり、1通の平均は1.19枚であった。

3) 用紙

媒体が確認できた188通をみると、メモ用紙43通、便箋40通、ノート30通、広告の紙15通、手帳10通、レポート用紙7通、日記帳7通などがあり、珍しいものとして相撲番付表の2通、名刺の裏の1通のほか、石膏ボードに残された遺書もあった。自宅の火災現場から発見された男性は、当初、失火による焼死と考えられたが、司法解剖時に、大腸内から油紙に包まれた遺書と考えられる紙切れが発見され、自殺と判断することができた。

4) 文字数

371 通の遺書について、句読点を除いた文字数を数えたところ、最も文字数の少ない遺書は、赤いマジックで書かれた「恨む」という 2 文字の遺書で、最も多いのは、5 枚にわたって詳細に死後の指示をしていた 2,591 文字の遺書であった。

さらに、宛先、署名、日付や時刻の部分を除いた本文の文字数を数えたところ、100 文字未満の遺書が 240 通と全体の 64.7% を占め、このうち、10 文字未満が 22 通、10～19 文字 45 通、20～29 文字 46 通、30～39 文字 31 通、40～49 文字 31 通、50～99 文字が 85 通であった。100 文字以上では、100～199 文字が 56 通 (15.1%)、200～299 文字 36 通 (9.7%)、300～499 文字 24 通 (6.5%)、500～999 文字 12 通 (3.2%) で、1,000 文字以上は 3 通 (0.8%) あった (図 1)。

5) 宛先、氏名、日付

遺書で宛先があるものは 243 通 (65.5%)、自殺者本人の名前 (署名) があるもの 110 通 (29.6%)、日付のあるものは 71 通 (19.1%) であった。

2. 自殺者の性別、年齢と遺書率

年代別の自殺者数と遺書率を図 2 及び表 1 に示した。868 例の遺書率は 34.2% で、男性 (567 例) の遺書率は 35.1%、女性 (301 例) の遺書率は 32.6% であった。高齢者については、男性は 90 才代が 57.1%、80 才代 43.3%、70 才代 31.6%、60 才代 32.3% であるのに対し、女性では 90 才代が 27.3%、80 才代 24.2%、70 才代 36.1%、60 才代 35.8% であった。一方、若い 20～30 才代では、女性の遺書率が、20 才代 54.5%、30 才代 42.9% で、男性では、20 才代が 35.1%、30 才代 25.7% であった。また、10 才代の遺書率は、男性が 9.1%、女性が 16.7% であった。

警察庁の全国統計¹⁾ から遺書率を算出してみると、1999 年の自殺者 33,048 人の遺書率は 27.9% で、男性の遺書率が 29.1%、女性の遺書率は 24.7% であった。文献的には、遺書率についての報告は少ないが、15～30% という数値が報告されている。渡辺⁴⁾ は昭和 30～32 年の東京都の自殺者の遺書率が 34.9% で、年代別にみると、遺書を残す者は若年層に多く、年齢層が進むに従って減少する

傾向が窺われると報告している。津田⁵⁾ は、昭和 52 年～53 年の神奈川県における自殺者 339 名の遺書率が 27.4% で、男性が 25.7%、女性が 30.8% で、男性より女性の方に遺書を残している場合が多いとしている。境野⁶⁾ は昭和 56 年～65 年の 10 年間の佐賀県における自殺者の遺書率を 27.4% とし、30 才代で 20.7%、40 才代で 27.5%、60 才代で 31.8% であったとしている。

3. 自殺の手段と遺書率

自殺の手段別に遺書率をみると (表 1)、縊死 (588 例) では 36.4% で、入水 (89 例) 19.1%、飛び降り (47 例) 25.5%、排ガス (42 例) 50.0%、劇毒物 (42 例) 26.2%、焼身 (19 例) 36.8%、刃器 (19 例) 52.6%、凍死 (7 例) 42.9%、銃 (3 例) 33.3%、ビニール袋・その他 (4 例) 25.0% で、鉄道自殺 (8 例) では遺書がなかった。更に、これを年齢別にみた分布を示した (表 1)。

入水自殺では遺書率 19.1% と遺書を残すことが少なかった ($p < 0.01$ 有意)。一方、排ガス自殺では遺書率 50.0% と遺書を残すことが多く ($p < 0.05$ 有意)、特に、50 才代男性の排ガス自殺の遺書率は 64.3% (14 例中 9 例) と高かった。また、刃器による自殺、男性の焼身自殺では遺書率が高い傾向を示した。

4. 自殺の動機と遺書率

警察では、自殺の動機として、以下の 8 項目の中のいずれか 1 つを選んでいる。

- ① 家庭関係として、親との不和、子との不和、配偶者との不和、兄弟との不和、嫁との不和、姑との不和、両親間の不和、家族の死亡、家族の将来悲観、父兄等の叱責
- ② 病苦等として、病苦、身体障害苦、老衰苦、身体的劣等感
- ③ 生活関係として、倒産、負債、事業不振、失業、就職失敗、生活苦
- ④ 勤務関係として、仕事上の失敗、上役等の叱責、仕事の不調、上司同僚との不和
- ⑤ 男女関係として、結婚反対、結婚忌避、三角関係清算、失恋、交際反対
- ⑥ 学校関係として、入試失敗、入試苦、学業不振、教師叱責、学友との不和

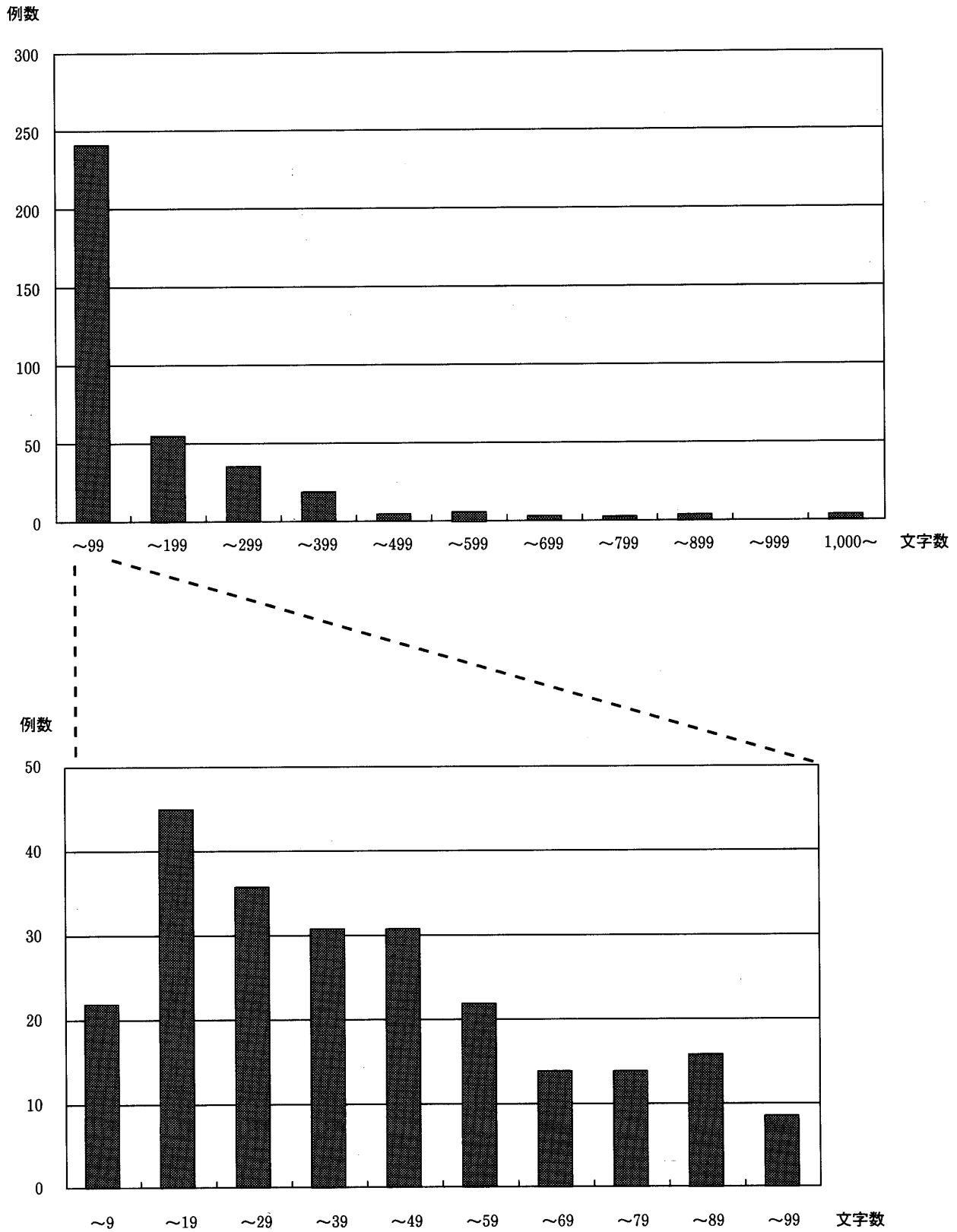


図1 遺書の文字数

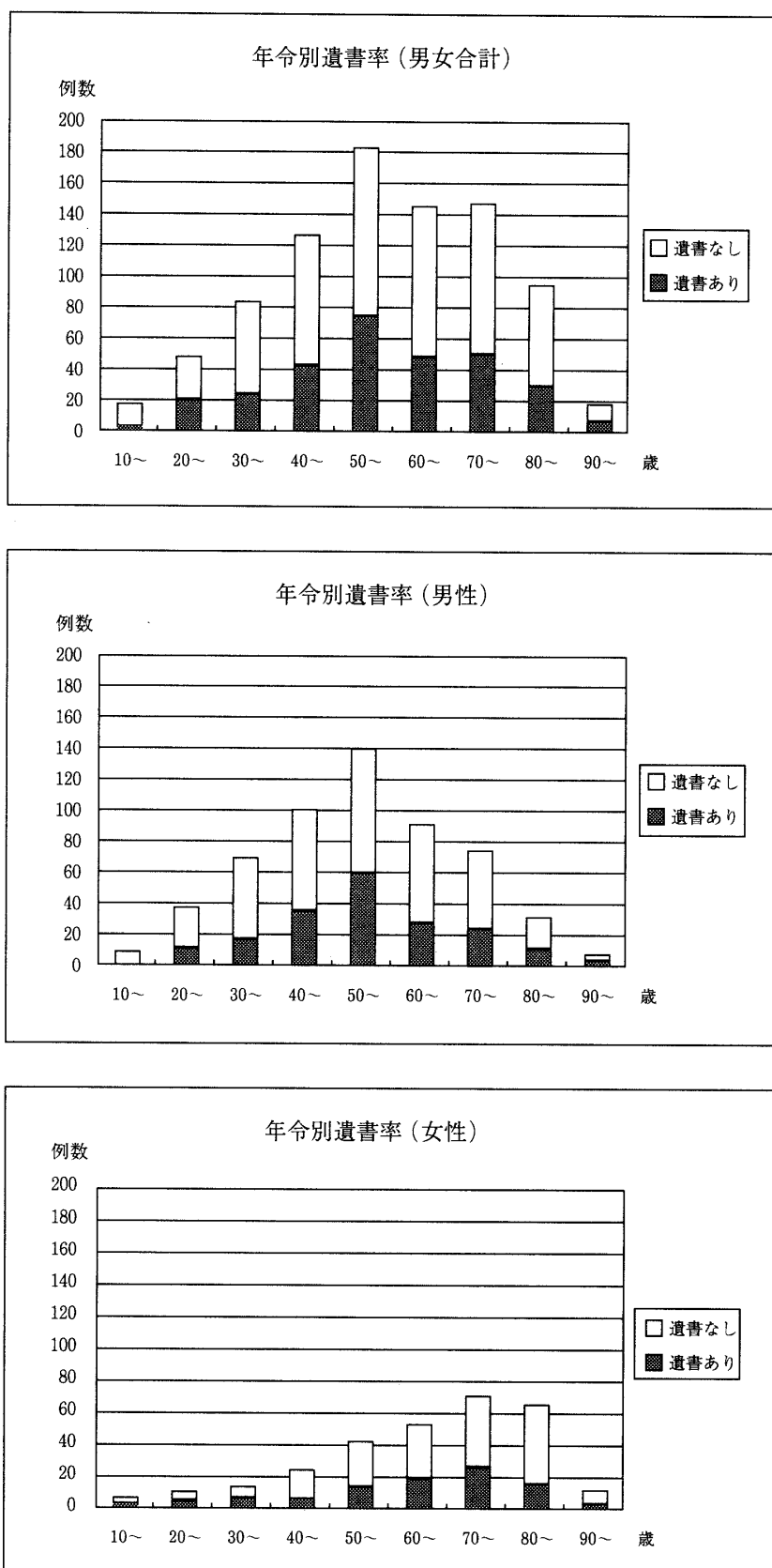


図 2 年齢別遺書率

表1 自殺の手段・年齢別にみた遺書率

	縊死	溺死	飛降り	排ガス	劇毒薬	焼身	刃器	鉄道	凍死	銃	ビニール袋	その他		
男性	遺書 縊死	遺書 溺死	遺書 飛降り	遺書 排ガス	遺書 劇毒薬	遺書 焼身	遺書 刃器	遺書 鉄道	遺書 凍死	遺書 銃	遺書 ビニール袋	遺書 その他	合計	年齢別 遺書率
10～	0 5	0 1	0 3		1 1	0 1							1 11	9.1%
20～	9 26	1 4	0 1	0 2	1 1	0 1	2 2						13 37	35.1%
30～	12 42	0 6	1 7	4 10	0 2	1 2						0 1	18 70	25.7%
40～	23 62	2 10	1 8	3 9	1 4	3 4	3 4						36 101	35.6%
50～	46 100	0 6	1 4	9 14	2 6	1 2	1 1	0 3	0 1	0 2		0 1	60 140	42.9%
60～	26 74	0 3	2 3	1 3	0 4	0 1	0 3		0 1	1 1			30 93	32.3%
70～	22 58	0 4	1 2		1 9	0 1	0 2						24 76	31.6%
80～	11 28		1 1								1 1		13 30	43.3%
90～	4 7												4 7	57.1%
不明	0 1												0 2	0.0%
計	153 403	3 34	7 29	17 38	6 27	5 12	6 12	0 4	0 2	1 3	1 1	0 2	199 567	35.1%
手段別 遺書率	38.0%	8.8%	24.1%	44.7%	22.2%	41.7%	50.0%	0.0%	0.0%	33.3%	100%	0.0%	35.1%	
女性	遺書 縊死	遺書 溺死	遺書 飛降り	遺書 排ガス	遺書 劇毒薬	遺書 焼身	遺書 刃器	遺書 鉄道	遺書 凍死	遺書 銃	遺書 ビニール袋	遺書 その他	合計	年齢別 遺書率
10～	0 3		0 2		1 1								1 6	16.7%
20～	2 6		1 2	1 1	1 1		1 1						6 11	54.5%
30～	3 5	0 2	1 4			0 1	1 1		1 1				6 14	42.9%
40～	2 10	2 7	0 1	1 1	1 2	1 1	0 1	0 2					7 25	28.0%
50～	7 22	3 11	1 3	2 2	0 1		1 2	0 1	0 1				14 43	32.6%
60～	13 31	2 11	1 3		0 1	0 2	1 2		2 2		0 1		19 53	35.8%
70～	20 44	3 13	1 3		1 7	1 3		0 1	0 1				26 72	36.1%
80～	13 55	2 9			1 2								16 66	24.2%
90～	1 9	2 2											3 11	27.3%
不明													0 0	0.0%
計	61 185	14 55	5 18	4 4	5 15	2 7	4 7	0 4	3 5	0 0	0 1	0 0	98 301	32.6%
手段別 遺書率	33.0%	25.5%	27.8%	100%	33.3%	28.6%	57.1%	0.0%	60.0%	0.0%	0.0%	0.0%	32.6%	
男 女 合 計	214 588	17 89	12 47	21 42	11 42	7 19	10 19	0 8	3 7	1 3	1 2	0 2	297 868	34.2%
手段別 遺書率	36.4%	19.1%	25.5%	50.0%	26.2%	36.8%	52.6%	0.0%	42.9%	33.3%	50.0%	0.0%	34.2%	

- ⑦その他として、アルコール症、覚醒剤による精神障害、その他の薬物による精神障害、その他の精神障害、犯罪発覚等、犯罪被害、後追い、あてこすり、思想、イデオロギー、孤独感、近隣関係、その他

⑧不詳

これに準じて自殺の動機別の遺書率を、主なものについて以下にまとめた。

- ①家庭関係：配偶者との不和 (21 例) の遺書率は 38.1% で、嫁との不和 (6 例) では 33.3%、子との不和 (6 例) 50.0%、親との不和 (3 例) 33.3%、家族の死亡 (5 例) 80.0% であった。兄弟との不和 (1 例) では遺書を残していなかった。
- ②病苦等：病苦 (261 例) の遺書率は 36.8% で、老衰苦 (18 例) は 22.2%、身体障害苦 (7 例) は 28.6% であった。
- ③生活関係：負債 (95 例) の遺書率は 49.5% で、事業不振 (22 例) 50.0%、倒産 (3 例) 33.3% であった。
- ④勤務関係：仕事の不調 (26 例) の遺書率は 46.2% で、仕事上の失敗 (3 例) 33.3% であった。このほか、職場などの人間関係 (8 例) のうち、上司同僚との不和 (5 例) では 80.0% と高かったが、上役等の叱責 (3 例) では遺書を残していなかった。
- ⑤男女関係：三角関係清算 (6 例) の遺書率は 33.3% であった。
- ⑥学校関係：学業不振 (2 例) の遺書率は 50.0% であった。
- ⑦その他：その他精神障害 (221 例) の遺書率は 23.1% で、アルコール症 (5 例) では遺書を残していなかった。このほか、孤独感 (21 例) 38.1%、後追い (7 例) 57.1%、近隣関係 (5 例) 60.0% であった。

自殺の動機別に遺書率をみると、仕事関係で高い傾向を示し、負債の 95 例での遺書率が 49.5% と高く ($p<0.01$ 有意)、事業不振の 50.0%、仕事の不調の 46.2% などであった。病苦の遺書率は 36.8% と全体の遺書率とほぼ同じであったが、その他精神障害とされた例では遺書率が低かった

($p<0.001$ 有意)。

5. 精神科の入通院歴と遺書率

自殺の背景には、なんらかの精神疾患や精神的苦痛を伴っているものが多いと思われるので、精神科への入通院歴の有無と遺書率を比べてみた。入院歴のある 103 例の遺書率は 16.5% で、通院歴のみを認めた 115 例の遺書率は 31.3%、両者を合わせた 218 例の遺書率は 23.4% となり、精神科受診例では、遺書を残している割合が少なかった ($p<0.001$ 有意)。これは津田⁵⁾ の報告と一致していた。また、精神科への受診歴のない例の中にも、多数の精神疾患が含まれていると報告されているが⁷⁾、今回の研究でも、入通院歴を確認できなかった例の中でも、検死報告や遺書の内容から精神疾患の存在が考えられたものが 139 例あり、その遺書率は 29.5% (41 例) であった。

6. 自殺未遂歴、自殺言動と遺書率

868 例のうち、過去に自殺未遂歴を有していたものが 113 例あり、死亡前に自殺言動を認めた例が 286 例あった。このうち、両方を有していたものは 52 例 (6.0%) であった。それぞれの遺書率は、23.0% (26 例)、25.5% (73 例)、15.3% (8 例) であった。自殺未遂歴 ($p<0.001$ 有意) や自殺言動 ($p<0.01$ 有意) を認めた例では、遺書を残している割合が少なかった。自殺言動の認められた例では、すでに周囲に苦痛を示していたため、また、自殺未遂歴のある例では、未遂行動を通じて現状からの救いを求めているため、遺書を書き残そうとしなかったのではないかと考えた。

7. 遺書の内容のキーワード

遺書の内容を分析するために、キーワードとなる言葉を選び、下記の (1) ~ (14) のように分類した。この分類に従って出現するキーワードを全ての遺書から検索した (図 3)。以下にキーワードの出現した例数及び通数を示した。また、これを年齢別にみると表 2 のようになった。

(1) 「謝罪」: 133 例 (57.8%) 186 通

「ごめん」という最も短い「謝罪」の言葉のほか、「ごめんなさい」、「申し訳ない」、「許して下さい」、「すみません」などを謝罪の言葉として分類した。

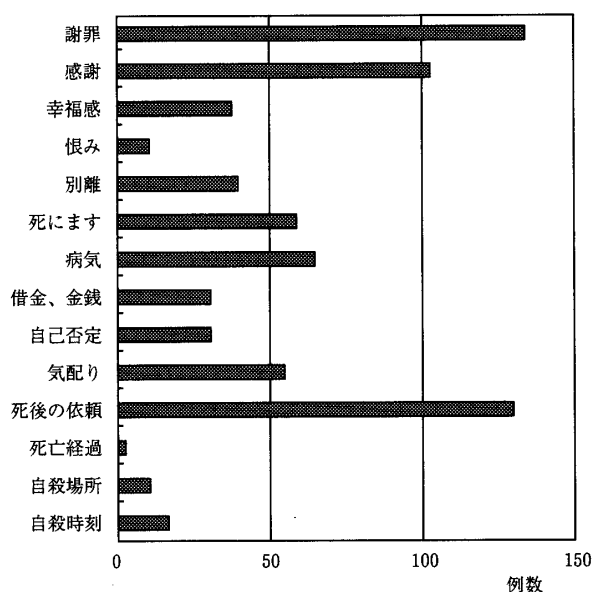


図3 遺書の内容

(2)「感謝」：102例(44.3%) 137通

「ありがとうございました」という全文11文字の遺書のほか、「ありがとう」、「お世話になりました」、「感謝している」などを感謝の言葉として分類した。特に、「お世話になってありがとうございました」という感謝の言葉が目立った。

(3)「幸福感」：38例(16.5%) 46通

「楽しかった」、「うれしかった」、「愛してる」などの「幸福感」を表す単語を分類した。「楽しい人生でした」、「結婚できて本当によかったです」などもあった。

(4)「恨み」：11例(4.8%) 11通

「恨む」という2文字だけの遺書があったほか、恨みや憎しみの言葉がみられた。

(5)「別離」：39例(17.0%) 46通

「さらば」、「さようなら」、「サヨナラ」が殆どであり、「乱筆乱文で お別れします」という文章もみられた。

(6)「死にます」：58例(25.2%) 65通

「死にます」のほか、「逝きます」、「眠ります」、「お先に失礼します」、「このような形で世を去らせていただきます」があった。「〇〇のところへゆく」と亡くなった家族の許にゆくという表現や、「ぶざまな最後」、「先行く不幸」、「時代錯誤の自殺

と自分の死を表現しているものもみられた。

(7)「病気」：65例(28.3%) 74通

「からだがいたいし なんざいし・・・」、「体じうがビリビリして・・・」などの身体的苦痛を訴えているものや、「ガンデス モウイキラレナイ」などと病気による絶望感を表す言葉が多かった。また、不眠や体調不良を訴える言葉や、「苦しくて生きていられない」という、うつ病の人の言葉もあった。「病気につかれた」という言葉が5例あったが、単に、「つかれた」というふうに、人生への絶望なのか、うつ病の易疲労感なのか、身体疾患の症状なのかの区別が困難なものは除いた。

(8)「借金、金銭」：31例(13.5%) 40通

「借金、金銭のメッセージの中には、「借金返済のため死亡することになりました」というように、借金から自殺に追い込まれる心理状態が窺える遺書もあり、詳細な借金リストや、返済方法など、細かく死後の指示をしているものが目立っていた。

(9)「自己否定」：31例(13.5%) 32通

「バカでした」、「弱いお母さん」、「いつも自分に 自身が無い 人に意見を言えない」というように、自分を過小評価する言葉がみられた。

(10)「気配り」：54例(23.5%) 68通

「がんばって下さいね」、「いつまでも元気でね」という激励や、「仲良く生きて下さい」、「体を大切にして下さい」という期待のメッセージがみられそのほとんどが家族に向けられていた。「体も弱り、動けなくなっていくうちに あの世に行きます」というような文章もあった。

(11)「死後の依頼」：129例(56.1%) 193通

「母を頼む」、「子供達をお願いします」のように家族の後事を託すもの、葬儀・通夜の依頼、生命保険関係の依頼など、死後の様々な依頼を残している例が多かった。このほか、「この車を売って下さい」、「さがさないで」などの頼みごとや「警察に電話110番」のように発見者への依頼もあった。また、「後をたのむ」、「死後をよろしく」というような漠然とした依頼も多かった。

(12)「死亡経過」：3例(1.3%) 3通

薬毒物中毒の2例では、死亡までの経過を時間を追って記録していた。他1例は、数日間、自殺場

表 2 年齢別にみた遺書内容のキーワード分類

キーワード	数例		1. 謝罪		2. 感謝		3. 幸福感		4. 根拠		5. 別離		6. 死にます		7. 病氣		8. 借金		9. 自己否定		10. 気配り		11. 死後依頼		12. 死に経過		13. 自殺場所		14. 自殺時刻	
年代	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
10才～	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
20才～	9	6	6	3	3	1	2	0	0	1	1	0	1	1	1	0	0	1	1	1	1	2	1	1	0	0	0	0	0	0
30才～	15	4	10	5	5	2	5	0	1	6	0	0	2	1	1	5	0	4	6	6	6	6	0	0	0	0	0	0	0	0
40才～	13	4	20	10	6	0	6	3	0	1	0	0	12	6	6	4	0	6	6	6	6	18	3	0	0	4	4	1	3	0
50才～	45	14	25	15	15	6	6	4	1	5	2	12	4	4	10	0	12	12	12	12	32	32	1	1	2	2	2	2	2	0
60才～	24	14	15	13	9	7	5	0	0	4	4	5	5	5	7	6	2	0	0	10	10	17	1	1	1	1	1	3	3	0
70才～	14	19	6	5	15	14	1	0	0	4	4	4	4	3	3	0	0	0	0	2	4	6	12	0	0	3	3	4	4	0
80才～	12	11	3	7	5	7	2	0	1	2	3	2	2	2	7	6	3	0	0	2	2	5	2	0	0	0	0	1	1	0
90才～	4	2	2	3	0	1	0	0	0	1	1	1	1	1	1	0	0	1	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	1
合計	155	75	87	61	41	27	11	7	4	24	15	40	31	34	24	1	24	39	88	41	3	10	13	2	2	2	2	2	2	2

所を求めて彷徨った夫婦例で、排ガス、刃物での自殺未遂後、縊死するまでの数日間の様子が残されていた。

(13)「自殺場所」：11例(4.8%) 11通

「作業所で死ぬ」、「浜へ行きます」など自殺する場所を示した遺書がみられた。

(14)「自殺時刻」：17例(6.5%) 17通

自殺決行時刻などの数字だけのものを含め、死亡迄の日時など、「時刻」が記されているものがみられた。

371通の遺書についてキーワード分類を行ったところ、「謝罪」の言葉が133例(186通)と最も多くみられた。これは、遺書の内容は謝罪文が大半を占めるという報告⁵⁾と同様な結果であった。謝罪の内容には、死ぬこと、自殺直後にかける迷惑、家族の面倒をみれなくなったことなどの将来に対する謝罪のほか、病気や借金などで生前にかけた迷惑に対する謝罪もあった。これらの謝罪の言葉によって表されていた自責感の背景には、うつ状態があることが窺われた。「お世話になりました。すみません。」のように、「謝罪」の言葉と「感謝」の言葉がつながっていたり、「病気」、「死にます」、「自己否定」等の言葉との組み合わせもあった。

次に、「死後の依頼」を示している遺書が129例(193通)と多かった。稲村⁸⁾は遺書には死後への依頼が多くみられると報告しているが、本研究の結果も同様であった。張¹⁰⁾は「死んだ後はよろしく頼む」という遺書を残した症例について報告し、困難な現実から逃避するものとしているが、本研究でも、遺書に死後の依頼が多く記されていたのは、自殺の背景に現実逃避が関係することを示唆するものと考えた。

「感謝」の言葉も102例(137通)と多く、これには「うれしい」、「楽しい」などという「幸福感」を示す言葉を伴っているものが多く、Tuckmanらも肯定的な感情を示した遺書が半数以上みられたと報告している⁹⁾。しかし、「幸福感」の言葉の裏に、家族の中での孤独感のようなさびしさが隠されていると感じた遺書もあり、「幸福感」の言葉を額面通りに読んでいいのか迷うこともあった。

「病気」のキーワードを持つ65例は、「謝罪」、「感謝」、「死にます」、「死後の依頼」などの言葉との組み合わせが多かった。「病気」と「謝罪」の組み合わせの内容では、病気で生前にかけた迷惑、自殺をすること、病気であることに対するものなど、病気に伴う自責感が窺えた。また「死にます」という言葉との組み合わせでは、「〇〇のところへ行きます」、「楽になりたい」という苦痛からの逃避が窺えた。一方、「動けなくなる前に死にます」と、周囲への遠慮から、病気がさほど重くないうちに死を選ぼうとしている例もあった。病苦は自殺の動機として最も多いものとされてきた^{6)11)~13)}。しかし、病苦には、家庭問題¹⁴⁾や、心理的な部分が強く関与しているという指摘²⁾¹³⁾もあり、専門科の手による心理学的剖検に基づく様々な調査⁷⁾では、いずれも9割近い自殺者が生前に抑うつ性障害を始めとする何らかの精神疾患に罹患していたとも報告されている。

8. 自殺の動機とキーワード

次に、警察で分類した自殺の動機と、キーワードの関係を表3に示した。この中で特に、「病気」というキーワードに注目してみた。警察で自殺の動機を「病苦」とした70例のうち、遺書に「病気」のキーワードを認めたのは44例(62.9%)であった。このうち、癌等の悪性腫瘍が10例で末期癌や再発で本人が苦しんでいた例が多く、脳梗塞2例、結核、間質性肺炎、メニエール病、坐骨神経痛の悪化、心臓病、失明なども本人の「病苦」を窺わせるものであった。一方、頭痛や不眠のみの場合もあり、「苦しくて生きていられない」という遺書を残した例では、身体疾患は確認できず、うつ病のみであった。次に、警察で自殺の動機を「病苦」としていながら、遺書に「病気」のキーワードを認めなかった26例をみると、脳梗塞5例、脊髄小脳変性症、膠原病など、生前の「病苦」の存在が確認できた例もあったが、精神疾患のみが確認された3例もあった。精神疾患だけであっても、本人がそれを苦にしていた場合には、警察は「病苦」に分類していた。警察が自殺の動機を「その他精神疾患」としている36例のうち、「病気」のキーワードを認めたのは12例(33.3%)であった。このう

表 3 自殺動機別のキーワード分類

キーワード	数例		1. 謝罪	2. 感謝	3. 幸福 感	4. 恨み	5. 別離	6. 死に ます	7. 病氣	8. 借金	9. 自己 否定	10. 気配 り	11. 死後 依頼	12. 死亡 経過	13. 自殺 場所	14. 自殺 時刻
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
病	33	37	15	15	4	7	0	1	19	0	4	8	16	0	4	0
老 衰	4	0	1	1	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0
その他精神障害	19	17	10	4	5	1	3	6	4	2	2	3	5	1	0	0
家 庭 関 係	8	2	6	3	3	1	1	2	0	13	1	4	6	0	0	4
生 活 関 係	54	6	32	21	9	1	1	15	4	10	10	16	38	2	3	3
勤 務 関 係	13	2	9	6	3	0	0	1	0	4	3	4	8	0	1	3
男 女 関 係	3	0	3	1	1	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	4
そ の 他	18	10	10	9	2	1	1	7	3	0	2	3	12	0	2	1
不 詳	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0
合 計	155	87	87	16	27	11	4	40	31	30	24	39	88	3	10	15

ち、司法解剖で、髄膜腫を認めた1例があったが、身体疾患としては体調不良程度のもが多かった。うつ病や精神分裂病などの精神疾患が診断されている場合には、他の動機がはっきりしない限り、「その他精神疾患」に分類される傾向があった。「病苦」と「その他精神疾患」の分類の基準は統一されていない。

また、「借金、金銭」というキーワードの認められた31例をみると、女性は1例のみで男性が30例と大部分を占めていた。また、「借金、金銭」というキーワードは、警察が自殺の動機を「生活関係」とした60例のうちの25例(41.7%)であった。

キーワード分類を通じて、自殺の動機を窺うと、複数の要因が多岐に関わっていることがわかった。警察では、動機として、前述の8項目の中から1つを選んでいるが、実際には、動機が競合する場合には主な動機を一つのみに限定することはきわめて困難¹⁵⁾であり、警察の自殺統計をみる場合には、数多くの動機のうちで、あえて一つの動機に絞らざるをえない点を念頭におかなければならない¹⁶⁾。特に、「病苦」と「その他精神疾患」の境界が必ずしも明瞭でないことに留意する必要がある、検死時における精神疾患の有無を確認する方法の確立が必要である。

文献的に遺書の内容の分類をみると、稲村⁸⁾は、遺書は自殺の心理を最もよく表明するものであるから、精神力動をもとに分類することも可能であるが、遺書には遺書独特の表現があるので、内容要素をまとめて実際的な分類を行うとして、①人生への疑問、②絶望感・悲哀感・死への憧憬、③恨みや攻撃、④死後への依頼、⑤別れの挨拶、⑥謝罪・弁解・説明、⑦その他の7つに分類している。このほか、Tuckmanら¹⁰⁾は、遺書の内容を、①他者に対する敵意、②自己に対する敵意、③中立的感情、④陽性感情、⑤他者に対する敵意と陽性感情の結合、⑥自己に対する敵意と陽性感情の結合の6型に分けている。さらに、大原らは、表現能力により、①単純なもの(1, 2行程度で要領よくまとまったもの)、②達意のもの(便箋で1, 2枚程度)、③迂遠冗長のもの(便箋で3, 4枚以上)に分けているが、これは長さによる分類といえる。本

研究で行った、キーワード分類は、遺書进行分析する手段として、遺書の中の言葉に注目することにより、誰もが容易に分類することができる利点がある。さらに、各々のキーワードごとに、その内容が、誰に対して、何を伝えたいかということを確認、キーワードの組み合わせを通じて、自殺の動機や背景を知ることができるようになる考えた。

9. 終わりに

自殺の研究は、統計的にならざるを得ない面があり、遺書について触れることは少ない。特に、死者の家庭環境や生前の精神状態まで深く調査する遺書に的を絞った研究は、プライバシーの問題や例数を集めにくいなどの点で困難を伴う。本研究では、新潟県における1999年の1年間の自殺868例を検討し、残された297例の遺書を読ませて頂く機会を得た。それを通じ、亡くなられた方々の無念さや悔しさの一部を肌で感じることができた。これは、法医実務活動の一環として行ったもので、プライバシーに十分配慮した上でデータベース化を試みたが、まだ、十分なものが出来たとは言えない。本研究では、ある程度の例数を集めることはできたが、自殺の背景に十分に踏み込むことはできなかった。しかし、遺書研究の入口に立つことはできたと考えており、今後は、自殺言動との関連など遺書の検討を深め、実際の自殺予防に役立つデータの収集解析につなげたい。

謝 辞

論文の作成に際し、山内春夫教授の御指導に深甚の謝意を表します。また、貴重な資料からのデータ収集に御協力いただいた新潟県警察本部刑事部の関係各位に厚く御礼申し上げます。さらに、終始ご指導・ご助力いただいた出羽厚二助教授、福田祐明先生、内藤笑美子先生はじめ法医学教室の皆様に厚く御礼申し上げます。

最後に、貴重な勉強をさせて頂いた、すべての方々の御冥福をお祈りします。

参 考 文 献

- 1) 死因の概要. 4. 主要死因—外因死②自殺. 国民衛生

- の動向 2001 48: 57-58 2001.
- 2) 山内春夫: 新潟県の自殺について. 日本人の自殺の実態把握と予防医学へのアプローチ. 文部省科学研究費補助金基盤研究 A-2 (代表. 吉岡尚文). 研究成果報告書 60-70 1997.
- 3) 越永重四郎: 自殺と遺書. 日法医誌 33: 468-484 1979.
- 4) 渡辺富雄: 自殺行動に関する研究—監察医務より見た自殺の種々相—. 日法医誌 13: 1-33 1958.
- 5) 津田征郎: 横浜市大法医学教室において取扱った最近 2 年間の自殺者とその遺書に関する統計的および社会医学的考察. 日法医誌 33: 398-407 1979.
- 6) 境野正武, 尾形 親, 松村父征生, 何 頌躍, 袖崎賢一郎, 藤谷 登, 的場梁次: 佐賀県下における自殺例の疫学的研究 1981 年~1990 年. 法医学の実際と研究 35: 371-380 1992.
- 7) 飛鳥井 望: 精神疾患による自殺の病理. 医学のあゆみ 194: 514-519 2000.
- 8) 稲村 博: 第 8 章自殺の心理・自殺学—その治療と予防のために—. pp257-268 1977.
- 9) 張 賢徳: 自殺行動の精神力動一体系の症例研究の試み—. 臨床精神医学 27: 1333-1344 1998.
- 10) Tuckman J et al.: Emotional content of suicide notes. Am J Psychiat 116: 59-63 1959.
- 11) 高橋節典, 香川昌人, 稲垣 徹, 塩野 寛, 上田 覚: 島根県における自殺の統計的検討 (1982~1985) —年次別, 月別の変動. 法医学の実際と研究 31: 319-325 1988
- 12) 山本好男, 山田光子, 福永龍繁, 龍野嘉紹: 滋賀県における自殺例の統計的検討 (1974~1988 年). 日法医誌 44: 190-198 1990
- 13) 吉岡尚文: 日本人の自殺—我々にその減少をはかれるか?—. 日法医誌 52: 286-293 1998
- 14) 上野正彦, 庄司宗介, 浅川昌洋, 大類正江, 木暮 達, 峯川宏一, 向井敏二, 長沢節代, 松崎源一, 鷺野正身: 老人の自殺. 日大医誌 40: 1109-1119 1981.
- 15) 高橋祥友: 景気変動と自殺. 精神科診断学 11: 291-298 2000.
- 16) 高橋祥友: わが国における最近の自殺の実態. [現代のエスプリ] 別冊 自殺問題 Q & A —自殺予防のために—. 291-298 2002.

平成14年 1 月 29 日